

可能表現 ラ抜きとプロトタイプ 5

サンフランシスコ州立大学／国立国語研究所
南 雅彦

まとめ

- 一般に、標準とされる言葉は一時代前の言葉で、その一方で、「乱れ」とされる言葉は新しく、いずれは市民権を得て普及してゆくものがある。
 - 「**ラ抜き**」、つまり一段動詞の可能形も五段動詞にならって、語幹に「られ」ではなく「れ」を付ける傾向が見られる現象(例:「食べられる」や「見られる」ではなく「食べれる」「見れる」)。
- 「今どきの若い人はちゃんとした日本語使わない」という批判がある一方で、多くの言語学者は「**ラ抜き**」は日本語の乱れというよりは論理的な変化であると説明してきた。
 - 一段動詞と五段動詞の受身形、使役形での規則的な相違から、一段動詞の可能形が「**ラ抜き**」であるほうが論理的であり、整合性があるという説明。
 - しかも「食べられる」だったら受身なのか可能なのか、尊敬なのかが不明瞭だが、「**ラ抜き**」ならそれらの区別も明確。

まとめ

- 認知的単純化に基づく**類推変化**は、たしかに起こっている。
- しかし、類推変化は使役形、受身形などからの**整合性**に基づく類推変化だとは考えがたい(認知的に、あまりに複雑！)。
 - こうした単純化は、現在の若者言葉にだけ起こっているわけではない。
 - 日本語学習者の誤用にも認められる。
- 外国語学習者の日本語でも若者ことばでも、単純化という方向性では一致しており、それが新しい造語の動詞が「る」で終わる、つまりラ行五段動詞をベースとした類推的拡張という現象に見られるのではないかと考えられる。
 - どのような話者にとってもラ行五段動詞がプロトタイプ (**prototype: 原型**)つまり、日本語の動詞らしい動詞になっている。(例: マクドナルドに行くことを関西地方では「マクド**る**」、関西以外では「マク**る**」と言う)。

- 子どもの言語発達・文法規則の獲得からも類推的拡張であることは明らか。
- 一段活用と変格活用が五段活用に吸収されていく統合の過程と捉えることも可能(真田 2006)

- **歴史的変化**を眺めてみる必要がある。
 - **方言**を眺めてみても、そうした活用が認められる。
 - しかし(**レ足す**言葉と**ラ入れ**言葉の相違など)完全には説明できない。
- 語幹が“r”で終わる子音動詞が日本語における動詞のプロトタイプとなっていることからの(一段動詞ばかりでなく他の五段動詞への)**類推的拡張・単純化**だと捉えれば、「**ラ抜き**」現象の説明はずっとシンプルなものになる。
- しかも「**ラ抜き**」現象に限らず、ラ行五段化は進行中である。
 - 大阪方言で「テレビを見ない」と言うとき、一段動詞の否定形「見ない(mi-nai)」を「見らん(mi-ra-n)」と言う。これは、ラ行五段活用、たとえば【知る】【走る】【足る】の否定形【知らない(shir-anai) → 知らん(shir-an)】【走らない(hashir-anai) → 走らん(hashir-an)】【足らない(tar-anai) → 足らん(tar-an)】などの類推から拡張化している。

ま

ラ抜き言葉、レ足す言葉、そして「チガクテ・チガクナイ」などから推測できるのは、日本語話者(子ども、日本語学習者を含めて)の捉える動詞の形態的プロトタイプやスキーマ(話者が捉える動詞らしい形とは何か:体系的知識)など、認知的な理由がかかわっているということである。

- 類推(analogy)変化は動詞に限らず、形容詞でも起こっている。
 - 「近い」「近かった」
 - 「違う・違い」「違かった」
 - 「違う」は動詞だが、意味的には形容詞的だから？

	動詞型	形容詞型	形容詞
終止形	違う		近い
過去形	違った	チガカッタ	近かった
否定形	違わない	チガクナイ	近くない
仮定形	違えば	チガケレバ	近ければ
テ形	違って	チガクテ	近くて